

高田俳句作品

山崎満世選

特選三句

初恋と私を攫って飛べツバメ

樽松望乃

ツバメの到来とともに春がやって来る。その燕の素早さ、鋭さ、は見事である。作者は燕に向かつて、初恋と私をいつそのこと攫って欲しいと叫ぶ。「攫って」の措辞がこの句の要となっている。青春の憂愁と若さがあふれている。

コーヒーを淹れてボンヤリ月の白

長谷川敬子

「月の白」と白を強調する。明け方の光景であろうか。コーヒーを淹れてしばらく何するでもなく、白い月を眺めている。空は澄み切り無心のひとときを過ごす。

玄関で蟬がいのちを散らしてゐる

長谷川瑛理

「いのちを散らす」の措辞に一瞬軽い衝撃を受ける。対象は蟬であるが、やはり終戦とか原爆記念日がある八月、夏を背景にして生きる措辞でもある。

秀作三句

音もなし朧月夜の黒き猫

伊藤空

朧月のなか黒猫が動く、いや動く気配を感じとる。黒猫が朧の雰囲気醸し出す。

初春や小さき鼓動に笑みあふる

伊藤典代

小さき鼓動は、生まれたばかりの子の生きている鼓動でもある。「初春」の季語がこの句のういういしさとして作者の感動を現す。

一人傘繋ぐ手探し小夜時雨

川崎星良

「一人傘」とわざわざと言うのは、二人を意識下においての措辞であろう。二人を意識しながら結局一人傘をさしてゆく作者。傘に時雨の音が淋しくひびくのみ。